

嘉田由紀子氏の特別講演「成熟社会を生きるための滋賀の施策」要約

1. 自己紹介

種の起源に興味あり、アフリカに行きたい高校生だった。修学旅行で比叡山からの琵琶湖の風景が忘れられなかった。(東大に入試のない年に)京大の探検部に入りたくて入学。11秒で全共闘に粉碎された入学式のあと、探検部の門をたたいたが女人禁制といわれた。男女交際で揉めた経験から女は入れないとなっていた。それは貴方達のせいでしょうと押し問答のすえ、初めて禁止を解いて入部した。今は女性の方が多いようだ。

京大がリベラルなんて全く嘘。同級の優秀な女性がドイツ文学で大学院の試験さえ受けさせてもらえなかった。女に院は不要と。

自分のエポックは、1972年「成長の限界」「水俣病のストックホルム会議」であった。農業経済の専攻の中、日本で一つしかない「農学原論」をとる。自然と人のつながりを学んだ。1973から76年までアメリカ留学。イギリス人の教授に「Yukikoは日本に帰りなさい。日本こそ、(当時は使われていなかったが)1000年を超える持続可能な農業を行っている国。水田という連作可能な農業は、すばらしい営み」と言われた。

2. 日本の現状

責任感、正義感、倫理感を失った三感欠如の「日本病」が蔓延。

エネルギーだけではなく、食、あるいは加工素材なども輸入に依存し、生産物を輸出する、という遠距離型依存経済システムに。これは物的、金銭的豊かさをもたらしたが、一方で地域経済の内的強靱性を失った。温暖化対策、琵琶湖保全、成長産業の振興、地域の魅力まるごと産業化が、この2点目のリスク環境・経済リスクへの対応政策。

3. 大戸川ダム(だいどがわダム)問題

新幹線の新駅増設は我田引水の一議員の問題。しかし、ダムは構造的な問題の典型。河川工学ムラという構造。その根幹は、関西圏では京都大学です。同じ釜の飯を食い、国交省、ゼネコン、一部の学者と人材が配分されるなかでのダム建設。滋賀県の専門職員ががんばって計算をしたら、国が意図的に過剰値をはじき出していたことがわかったこと。

4. 琵琶湖について

琵琶湖の過去の危機は、2回ある。戦争中からの内湖の水田化。これは水質に大きな

影響を与えた。食糧が足りてきたのちも継続されてしまったことが大きい。水質浄化へ大きく寄与するセタシジミの生息地を奪った。そしてなんとといっても「琵琶湖総合開発事業」(1972-97)。1450万人の上水を担う。有馬温泉の水道も琵琶湖の水。知っている人は少ない。電力だけでなく地産地消が必要なのは、水も同じ。

私は決して「水がめ」とは呼ばない。呼ばせない。「命の水源」と言いたい。水がめ論は、汚くなればきれいになる薬剤を入れればいい、となってしまう危うさがあるため。1450万人の命の水源である。しかし、琵琶湖にとって大きな水位変動をもたらした。

福島原発事故で水道水が飲用制限された東京は、福島と200kmあるのだが、福井原発と琵琶湖北端はたった10数kmしかない。このことが頭を離れない。

5. 子育て支援・産業振興などの政策について

滋賀県は、合計特殊出生数が、1.51（全国平均1.38）に下方から上方へ変化した。

これを施策の効果とみるか否かは別におき、増えたことを喜ぶたい。

京阪地域のベットタウンとしての発展は第一義にあるが、大学の数が増えたことも大きいと考えている。

- ・これまでの産業振興は、生産者側への対応しかなかったと言っても過言ではないだろう。ここにメスを入れ、生産物の流れ全体への施策を試みている。
- ・教育現場でも子供たちに働くことをイメージできるような取り組み（職業訓練）もこれまでまったくなされていなかった。中学生チャレンジウィークのように県内の企業・商店などの協力（そうだ、県庁も）で実現している。
- ・女性の就労支援をワンストップで行える場を作ること。ここにはメンタルケアは欠かせないもの

さいごに

こどもたちの声が響かない町や社会は、異常なことです。国・行政がまず取り組まなければならないことは、人口減少対策と思っています。大津のいじめ問題の学校は、最も人口増加の激しい地域。先生方は疲れ切っているのです。40人学級をせめて30人できれば20人学級にしたい。市区町村の学校でも先生の人件費は県からでている。県の人件費の大部分は、先生方です。よく県職員が多いと批判されることがありますが、純職員の比率は低いもの。

比叡山は大津市です。文化層も厚く、江戸は滋賀に模して作った町（一例；不忍池を琵琶湖に見立てている）。

まだ余地もあります。どうぞみなさん滋賀に住んでください。

私も琵琶湖のほとりで命を終える日を迎えたいと願っています。

以上

(文責は、権上かおるにあります。テープ起こしなどでの記述ではないこともご了承ください)